

シャドーの仕方、園・学校との連携の取り方

2012/05/13 名古屋定例会

藤坂龍司

1. シャドーの意義

<シャドーとは>

「シャドー」(スクールシャドー)とは、園や学校で発達障害を持つ子どものそばに付き、子どもを援助する役割の人。日本では、付添い、介助員などと呼ばれる。

ロバース博士は、子どもを家庭で集中的に療育した後、健常児の集団の中に子どもを入れるにあたって、セラピストの一人をシャドーとして付けた。シャドーはピアトレーニングと並んで、集団への適応を促進するための重要な鍵だと思われる。

<なぜシャドーが必要か>

自閉症児はある環境で学んだことを、そのままでは他の環境に応用することが難しい。つまり家庭でできるようになったことでも、園や学校で発揮できないことが多い。そこで家庭で学んだことを園や学校で応用することを促し、援助する人間が必要となる。これがシャドーである。

<シャドーの適格性>

シャドーはABAの知識を身につけていなければならない。しかも担当する子どもが今何ができて、何ができないかを熟知している必要がある。したがって家庭でその子どものセラピーを担当している親かセラピストがシャドーになることが望ましい。

親やセラピストがシャドーにつけない場合は、園・学校に加配・介助員をつけるようお願いするか、付添いなしで頑張らせるか、どちらかになる。園・学校が加配をつけてくれた時は、できるだけ適切な援助をお願いしなければならない。

<親がシャドーに付くこと>

米国ではたいていセラピストがシャドーとして付くようだ。しかし日本では親がシャドーに付くケースが多い。

親はわが子に対して客観的になることが難しいし、子どもも親がそばにいると甘えてしまったり、逆に反動的になったりする。だから親がシャドーになることはよいことばかりとはいえない。

しかし現実問題として日本ではABAセラピストへの認知が低く、プライバシーへの配慮などから外部者の受け入れに園・学校は慎重である。その点、親による付添いはまだしも受け入れられやすい。

<親がシャドーになることのメリット>

親がシャドーに付くことには次のようなメリットがある。

- ・園・学校がつける介助員は、安全確保だけが役目であることが多い。親であれば、もっと積極的に集団行動や関わり遊び、会話などを促すことができる。

- ・園・学校に付き添うことで、子どもに何が足りないかが見えてくる。それを家に持ち帰って、家で練習することができる。家庭で身につけたら、それをまた園・学校に持ち込んで般化させる。

- ・現実的な問題として、親ほど自分の子どものために時間を割ける人間はまずいない。セラピストであれば週2、3日が精一杯でも、親なら毎日付添うことができる。

<シャドーが必要な子ども、撤退時期>

元々は家庭療育でかなり改善し、高機能かそれに近くなった子どもを、健常児の集団の中に入れ、最終的にはそこで一人でやっていけるようにすることがシャドーの目的である。その場合は、シャドーそのものが徐々にフェードアウトしていかなければならない。

しかしもう少し重いお子さんだとシャドーをつける意味がないか、と言えば、そうではない。たとえ知的にキャッチアップすることは難しくても、健常の子どもたちの中で過ごし、そこで得られるものを吸収することには大きな意味がある。付き添いがなければ普通学級で過ごすことが無理な子どもでも、シャドーが適切な援助をすれば可能になることがある。その場合は、シャドーは必ずしもフェードアウトが必要とは限らない。卒業までシャドーを継続することもありうる。

2. シャドー受け入れの交渉

シャドーを希望するときは入園・入学の前の年の春か夏に園・学校に相談に行く。予め電話で用件を言って、園長・校長に面会を求めよう。できるだけ両親がそろって行くこと（パパは背広で）。

教育委員会や市会議員に働きかけるのもよいが、その場合でもまずは園長・校長に先に相談をして、彼らに断った上で上部に働きかけを行なうこと。この順序を飛ばすとこじれることがある。

幼稚園の段階からシャドーをしていると、「すでに実績がある」ということで小学校でも認められやすい。ただ私立幼稚園の場合、園長や理事長の考えがすべてなので、受け入れを拒否されたら終わりである。無駄なあがきはせず、別のところを当たろう。公立の方がまだしも交渉の余地がある。

面会のときはシャドーの意義、希望する理由を真摯にお話する。A4版1～2枚の紙にあらかじめ趣旨を書いておいて、お渡ししてから話しをするとよい。その際、園・学校で見たことは決して他言しない旨の約束を入れておく。学校が一番気にするのはそこだから。

親がシャドーに付くというと、「子離れしてないだけ」と思われがちなので、面接では自分が子どもを客観的に見ている、ということを示さなければならない。

あと公立学校は前例がないことはやりたがらないので、よその自治体でもよいから、発達障害児に対して親がシャドー（付添い）に付いている事例があることを示せるとよいだろう。

3. シャドーの仕方

<基本>

「シャドー」と言っても、そんなに難しく考えなくてよい。ABAの基本はいつも「プロンプト&強化」。子どもの行動をそばで観察していて、必要だな、と思ったときに必要な行動をプロンプトし、ただちに強化をすればいいだけのことである。お菓子は使えないのでほめ言葉やトークンを使おう。

<やってはいけないこと>

やってはいけないことは「指示の出し過ぎ」。子どもができないからと言って、せかせかせかしたり、叱ったりしていると、子どもはますます、あなたの声かけがなければやらない子になってしまう。指示は一回だけ。落ち着いた口調で明確な指示を出し、まだできないことなら直ちにプロンプトして成功させる。おだやかにほめて強化し、次から徐々にプロンプトをフェーディングしていく。

<過剰支援>

もう一つの「やってはいけないこと」は「過剰支援」。子どもができるはずのことまでつい世話を焼いてしまっているのは、シャドーの意味はない。時にはじっくり待ってみて、子どもが自分でできるかどうか、試してみることも必要。もしできたら、心からほめてあげよう。だめだな、とわかったら、落ち込まずに次からプロンプトを再開して、それを徐々に減らして行く。

<長期目標>

大切なのは、目標をしっかり持つこと。まず長期的に何をを目指すのかを、しっかり頭に入れておく。

目先の授業に付いていけるようにすることだけを考えていると、いつの間にか、あなたがそばにいないければ何もできない「指示待ち人間」になってしまう。学校で学ぶことは学業だけではない。先生の指示を聞き取り、周りの子どもの動きを見て、次に何をすべきかを自分で判断できるようになることがとても大切。そのためにどのタイミングで指示やプロンプトを減らすべきかを常に意識しよう。

<短期目標>

次に短期的には何を当面の目標にするか（標的行動）を場面ごとにはっきりさせておく。漠然と「みんなについていけるように」とか「みんなと仲良く遊べるように」と考えているだけでは、何を援助していいか、見失ってしまう。

例えば朝の時間は、自分でかばんをロッカーにしまいに行くことを当面の目標にする。工作の時間は先生が説明する間、それを見て聞くことを目標にする、など。一度にあれもこれも、と欲張るのではなく、「いまはこれとこれ」と決めたら、それ以外の時間は子どもに好きにさせておき、その場面になったときだけすばやく指示やプロンプトをする。そうすればシャドーもぐっと楽になる。常にスモールステップを心がけ、一つの行動ができるようになったら新たな目標を定める。

<シャドーの定位置>

ABAに基づく支援は、プロンプトにしても強化にしても、「即時」が大切。子どもが必要とするときに即時にプロンプト&強化するためには、子どものすぐそばにいないなければならない。だから子どものすぐそばを自分の定位置と考え、当面その位置をキープすること。授業中は椅子をもらって子どもの席の横にすわる。朝礼の時も子どものすぐそばにいること。

園や学校側は、シャドーをできるだけ早く子どもから引き離そうとするものだ。「お母さん、お子さんのそばにいますとお母さんがお母さんのことを気にしますから、うしろで見ていて下さい。」そう言われて素直に従うと、次は「廊下で見ていて下さい」。その次は「もう来なくていいですよ」と、一カ月で学校から追い出されてしまうだろう。だから学校側が何と言おうと、当面は子どものそばから離れないこと。いつ離れるかはあなた自身が決める。

1, 2カ月経って「この場面は、もう子どもだけでできる」と見極めたら、その場面ではシャドーは少し離れたところから見守るようにする。しかし必要ならいつでも定位置に戻れるようにしておこう。

<問題行動への対処>

子どもに問題行動があれば、それを防ぎ、減らすことがシャドーの大事な役目になる。例えばお友達をたたく行動がある場合は、できるだけ未然に防ぎ、たたいてしまったら無視して消去するか、タイムアウトをするなど、その場でABAの原則に従って必要な措置をとる。

ただし問題行動にばかり気を取られると、子どもは改善しない。むしろ適切な行動のレパトリーを増やすことに力を注ぐこと。できることが増えれば、自然に問題行動は減ってくる。

4. 場面別指導ガイド（小学校編）

（1）登校

○あいさつの指導

校門に先生がいることが多いので、あいさつを促す。

指導方法：先生が「おはよう」と声をかけてくれたら、「おはようございます」と言ってやってあいさつを促す。できたら小声でほめて強化。だんだんプロンプトを減らし、「おはよう」と声をかけてき

た瞬間に黙って背中を押すだけにする。

先生が声をかけてくれるのを待たずに自発的にあいさつさせたい場合は、先生のそばを通るときに「おはようございます」と言ってやり、背中を押してお辞儀を促す。だんだんプロンプトをなくし、そばを通るタイミングで背中をそっとさわるだけにする。校門が近づいたら、「先生に『おはようございます』って言うよ」と注意喚起しておくのもよい。

○げた箱での指導

靴を脱いでげた箱に入れ、上履きを出して履き替えることを教える。

指導方法：なるべく声かけをせず、無言で促す。すのこの前で靴を脱いだら、すかさず自分の下駄箱から上履きを取ってすのこの上に置かせ、上履きを履かせてから、すばやく手を取って靴を持たせ、げた箱に入れさせる。

チェインニングの流れ：靴を脱ぐ→げた箱から上履きを取り、すの子の上に置く→上履きを履く→靴を持ってげた箱に入れる→教室へ向かう

一つの動作の終了がそのまま次の動作の引き金になるように、動作が終了すると同時に次の動作を無言で促すようにするのがコツ。徐々にそのプロンプトをフェーディングしていく。

○教室での朝の支度

教室に入ったら、ランドセルを自分の机に降ろし、椅子に座ってランドセルを開けさせる。まず提出物を教卓に持っていき、仕分けしてそれぞれのところに置く。このときマッチングが役に立つ。いいかげんに置こうとしたら制止して2、3秒あけ、もう一度手渡してプロンプトして正しい位置に置かせる。戻ってきたら、教科書・ノート、筆箱を机の中に入れ、空のランドセルを自分のロッカーに持って行かせる。

これらをげた箱での指導と同じく、ほぼ無言で、身体プロンプトや指さしによって促す。最後までできたら、初めてほめて、自由を与える。毎日やりながら、徐々にプロンプトフェーディング。

(2) 朝の会・朝礼

○あいさつ

係の子が「立って下さい」と声をかけたら、すぐに促して立たせる。ぼっとしている子どもなら、号令の少し前に「ほらほら、はじまるよ」などと声をかけて、注意を戻しておいてもよい。ずっと集中力を保つのは最初は無理なので、ここぞというときだけ注意を戻させる。

だんだんプロンプトをフェーディングして、例えばみんなが立ったときにそっと背中に指を触れるだけにする。タイミング良く立てたら、あいさつが済んで子どもがすわってから、「えらかったね。ちゃんと立てたね」などと小声で言って強化する。

○先生の指示

朝の会では先生がいろいろ大事なことを、どうでもいいことを言う。最初の方に大事なことを言うことが多いので、その時は注意を先生の方に向けさせ、指示を聞き洩らさないようにさせる。「聞いててよ」「何て言った?」「そうだね」などと小声で先生の言ったことを注意喚起、確認、強化する。それほど大事ではない話や子どもが理解できない話のときは注意喚起せず、静かにすわっていられたら強化する。

○朝礼

学校では週に一回、校庭に全校生徒が集まって朝礼がある。朝礼の時は教室で遊んでいた子どもたちがいつの間にかいなくなってしまうので、ぼんやりしていると一人だけ取り残されてしまう。「あれ、みんなどこに行くのかな（行ったのかな）」などと注意喚起して、校庭に出る行動を促そう。

校庭に出たら、自分のクラスの場所を覚えさせる。4月は最後まで誘導する。5月は少し手前から自

分のクラスを探させる。6月はもう少し手前から、というように徐々に自分で自分のクラスを探せるように持って行きたい。そのためにはクラスのお友達の顔を覚えさせて、それを手掛かりにさせる必要がある。顔が覚えられなければ無理である。

朝礼では、延々と先生の話や表彰などがあり、おとなしく待つ時間が長い。子どものそばについて、静かに立っていられたら、時々、「えらいね。いい子にしてるね」などと小声でほめて強化しよう。ピョンピョン飛んだり、前の子をさわろうとし始めたら、「お手手ちゃんと」とか「気をつけ、ピ」などと声をかけ、必要ならプロンプトして従わせる。従ったらほめる。他の問題行動も、それを咎めて「～しないよ」と否定的な言い方をするよりは、「〇〇するよ」と取るべき行動を肯定形で指示して、それができたらほめるようにしよう。

時間を持て余すときは、ひもとかはっぱなど手いじりする物を持たせてもよい。しゃがんでいるときは先生の許可をもらって、砂をいじらせてもよい。

数カ月、あるいは数年して、朝礼の間、そばにいなくても適切な行動が取れるようになったら、少しずつ子どものそばを離れる。最初はクラスの列の一番後ろに。次いで校庭の隅に。しかし子どもが不適切な行動を取り始めたら、直ちにそばに戻ることに。

(3) 授業中

○授業中はいすをもらって子どものすぐ横、あるいは斜め後ろにすわる。子どもの席はなるべく廊下側か窓側にしてもらおう。

○なるべく子どもと二人だけの世界にならないように、子どもには先生の方に注意を向けさせ、必要な時に短い指示やヒントを出すに留める。

○子どもが授業についていけないときは、先生の許可を得て、別のもっと簡単な課題をさせてもよい。

○手持無沙汰にしているときは、落書き帳などを用意しておき、それを出させて、何か書かせるなどして周囲の迷惑にならないように暇をつぶさせる。

○他の子どもが助けを求めてくることがあるが、基本的には「先生に言いなさい（聞きなさい）」と言って担任の先生のところに行かせるように。ただ先生も手が離せないようなときはこっそり教えてあげてもよい。シャドーは先生の代わりではない。担任教師のお株を奪うようなことがあってはならない。しかし目立たないように控え目に他の子どもも援助すると、担任にも喜んでもらえるし、他の子どもたちもシャドーを好意的にとらえてくれるだろう。

○体育の時間もなるべくそばについておく。必要がない場面では離れて見守る。

(4) 休憩時間

○休憩時間は外に出て、比較的良くしてくれる同性のお友達と同じ行動を取らせる。お友達がドッチボールをしていたら、仲間に入れてもらう。お友達がブランコで遊ぶときは、ついて行ってブランコで遊ばせる。お友達が声をかけてきたときは、正しい返答の仕方をその場でプロンプトする。

○他の子どもたちが暇そうにしていたら、シャドーが遊びを提案してもよい。その代り、あなたの子どもを必ず一緒に混ぜてもらおうこと。授業中と違って先生はいないのだから、積極的に動いてもかまわない。

○高学年になると、頑張っても同性のお友達の輪の中に入れなくなることが多い。低学年でも、お友達についていけない場合はある。そういうときは教室で本を読むなどして、一人で時間をつぶすことを教える。

5. 園・学校との連携

特別支援学級・学校を選んだ場合や、普通学級を選択しても親やセラピストがシャドーにつけない場合には、園・学校とよく話し合い、こちらの希望を伝えて、できるだけそれに沿った対応をお願いすることになる。

<相談のタイミング>

まず入学前に何度か話し合いを持ち、こちらの要望を校長・教頭に伝えておく。

入学したら担任の先生に改めてこちらの希望を伝えることになるが、担任教師は、自分の担任する子どもたちを、まず先入観なしに見たいものだ。だからそんなにあせらずに、4月下旬に初めての個人面談があるので、その時に相談するとよい。以後も学期ごとの個人面談がこちらの要望を伝える主な機会になる。

<要望の伝え方>

面談ではABAのことはあまり前面に出さず、子どもに接する上でお願いしたいことを、あくまで低姿勢をお願いするとよい。「教えてやる」という姿勢は嫌われる。

こちらから「ああして下さい。こうして下さい」と言わず、まずは学校に任せてみて、向こうから聞いて来た時に初めてABA的な対応法を小出しに説明するのも一つの方法である。

<連絡帳>

日頃の連絡は連絡帳が頼りになる。いいことも悪いことも、正直に書いてもらうように、子どもの悪い面が書いてあっても、穏やかな肯定的な返事をする。その上でやんわりと対処法を提案してお願いする。肯定的な面が書いてあったら、もちろん喜びを書き表し、感謝の言葉を書く。

<IEP>

特別支援学校や支援学級では一人一人の子どもに毎年、個別支援計画（IEP）を作ることになっている。IEPの元祖米国ではIEP作成会議が重要な役割を果たしている。会議には担任、支援コーディネーター、親などの関係者が一堂に集まり、その子どもに今後一年間、どのようなことをどのような方法で指導すべきかを話し合う。そこで決められたことは法的な拘束力を持つ。

しかし日本ではIEPはそれほど重視されておらず、形だけのものになっている。あまり期待しない方がよいだろう。

<特別支援教育コーディネーター>

小学校には「特別支援教育コーディネーター」を置かなければならないことになっている。教師の一人が特別支援教育について講習を受け、主に普通学級にいて特別な支援を必要とする子どものことを担当するのだが、私の娘の学校ではほとんど機能していなかった。これもあまり期待しない方がよい。

<巡回相談>

幼稚園・小学校には、教育委員会が委託した発達障害児教育の専門家が学校を巡回して、特に問題を抱えている子どもの扱いについて担任教師の相談に乗る、という制度がある。この専門家がABAに好意的だと都合がよいのだが、しばしば正反対で、困った存在になる。親の働きかけで担任教師がABA的に子どもに接してくれていても、このえらい先生が巡回してきて、方針をひっくり返してしまうのだ。そういう場合はひたすら我慢して、その先生が学校の信頼を失うまで待つしかない。

<特別支援学級>

特別支援学級、支援学校では、アカデミックスキルはまず教えてもらえない。学校に入っても、勉強は親が家庭で教える、という心構えを持っておいた方がよい。